

幡枝八幡宮 はたえだ はちまんぐう 「同所の丑寅小山の上にあり、祭る所石清水と同じ。当村の号は此勧請によるなり、年歴詳ならず」

粟穂辨財天社 あはほのべんさいてん 「野中村の路のかたはら西側にあり、祭る所は弘法の作の辨財天女を安置す。伝云、此天女当地影

向のはじめは、むかし村老の夢に美女忽然として枕上に来ていふ、われは此河上にすむ弁財天なり、家は西方にあつてこゝろは東方にかよふ、鞍馬寺の毘沙門天と誓約あるをもつて、居を多門天の近隣にしめて王城を守護す、此ところはすなはち福徳田満の地なり、われをこゝにとゞめば福栄なんと。告終てさめて後奇異のおもひをなして、河のほとりにいづるに、六寸の白蛇粟の穂に坐せり。一村衆議してまづ仮殿にうつし、其後社壇を造つて鎮坐しけり、これを客人粟穂御前となづけたり。時に永享二年九月九日の夜の霊夢とぞ、応驗ますく新なり」

神明宮 しんめいぐう 「同所辨天社のひがしにあり。祭神、天照太神、社殿の茅葺いと神さびて、めぐりの樹林蓊鬱とし、鈴の音は玲瓏ときこえて、いと深々たる霊園なり」

立田社 たつたのやしら 「同所道のかたはらにあり、神伝詳ならず、土人産砂神とす」

福借毘社門堂ふくをしみのび しやもん だう 「同所立田たつたの北きたにあり。近年あらためて福富ふくとみと称す。世の諺ことわざにいふ、此多門天たもんてんは福ををしみて、鞍くら

馬寺までらの多門天たもんてんに参詣まゐしてさづかりかへる福を此所こゝにてうばひとゞめらるゝといふ、此ゆゑゆゑに鞍馬参詣くらまの人は此所の東の道を通るなり。由縁不詳ゆゑん ぶしやう」

巷辻ちまたのつち 「毘沙門天堂びしやもんてん だうの傍かたわらにあり。これより北はくらま木船きぶねにいたり、右の方は静原しづはらにいたるちまたなり」

静原しづはら 「ちまたの辻つじより十町余じゅうちやうあまにあり、此所山間このところやまのまへにして南北なんぼくにわたり人家多し」

山家集 山がつの住方みゆるわたり哉冬やふゆいにあせ行静原しづはらの里 西 行

薬王坂やくわうざか 「しづはらより大原おほはらにこゆる坂なり。土人どじんやつこ坂、あるひはやこう坂さかと云。土佐坊昌俊とさぼうしやうしゆん京きやうより此所このところに逃来にげきりしなり」

源平盛衰記云 昌俊しやうしゆんは大原路おほはらぢにかゝり、龍華越りうげをこゝろざし、北山きたやまをさして落けるが、軍兵ぐんべい二手にて三手にさしまはし、前まへをきつてのべやらず。昌俊しやうしゆん大原おほはらより薬王坂やくわうざかをこえ鞍馬山くらまやまににげ籠る。已上いじやう卷四十六十三丁。龍華越りうげは大原おほはらの北

近江路あふみぢにあり」

をのくわうたいこうぐう 小野皇太后宮の旧跡 「此ほとりにありしとなり、旧趾詳ならず、後人考あるべし。后宮は後冷泉院これいせいあんの后にして、

うちくわんばくよりみち 宇治関白頼通公の第三の女なり、御諱は観子くわんし」

続世継物語云 三の君は後冷泉院ごれいせいあんの女御に参りて后に立給ひて皇后宮くわうこうぐうと申しき。後に皇太后宮くわうたいこうぐうにあがりて承保元年の

秋御ぐしおろし給ひて、后の位にてひえの山のふもと小野をのといふ里に籠るさせ給ひて、都の外におこなひすまし給

へり。(下略)